

会報特別号の発行に当たって ～我々がつなぐべき思いを～

福島県小学校長会会長 佐々木 義 通



時間が経つのは早く、2011年3月11日に発生した東日本大震災、そしてその後に起きた東京電力福島第一原子力発電所事故から早10年目を迎えました。現在、県内の多くの学校では震災前とほぼ同程度の教育活動ができるようになってきており、震災後に生まれた子どもたちも数多く在籍するようになってきました。そして、あたかも何事もなかったかのような毎日を送っています。「十年一昔」とはよく言ったもので、10年も経つと遠い過去の出来事のように錯覚してしまうのは、人間ならばこそでしょうか。すると、我々が「風評の払拭」とともに全国に訴え続けてきた「記憶の風化」は、自らの心の中にも少なからずあるのではと反省をしたところでした。

ところが、実際には東京電力福島第一原子力発電所周辺の被災地域にある学校は、未だ地元での学校再開はできず他の地域で教育活動を行っている状況であったり、さらに地元で再開した一部の学校においては、極少数という状況のもとでの学校運営が余儀なくされたりしています。また、本県では、校長の大量退職や新任校長の増加に伴い、当時の校長が緊迫する中で必死に頑張った記憶が少しずつ薄らいできているのも事実ではないでしょうか。

こうした状況を踏まえ、この度、当時、困難や試練に直面しながらも教職員が強い意思と使命をもって取り組んだ様子を改めて県内の各校長に伝えることで、本県小学校教育の充実に寄与することを願って本特別号の発行を思い立った次第です。さらに、次年度から全面実施される新学習指導要領の下での防災教育等の充実に生かされることへの期待もあります。

本特別号では、まず、今年度実施した被災地の小学校長との懇談会と原子力発電所事故現場等の視察の様子を取り上げました。参加された他県の校長先生方からは、本県教育界への激励とともに、「記憶の風化」を危惧する言葉をいただき、「復興未だ半ば」との思いを強くしたところです。また、県内それぞれの地域で復旧・復興に当たられてこられた校長先生方による座談会では、当時の困難や苦労の状況から得た教訓を語っていただき、まさに「疾風勁草」の思いを共通に抱きました。その他、各支会の9年間のあゆみ、震災から学び伝えたい教訓、そして被災した学校の再開のあゆみも載せましたので、今後、是非自校の教育活動や各校長会等で参考にしていただければ幸いです。

結びに、本特別号の発行に当たり、貴重な情報をお寄せいただいた震災直後の本会会長であられた現二本松市教育委員会教育長 丹野学先生、玉稿をお寄せいただいた先生方、編集等に当たられた県広報部の先生方にお礼を申し上げます。

東日本大震災被災地懇談会及び視察 報告

令和元年11月6日(水)・7日(木)

福島県小学校長会では、東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故の甚大な被害、そして、未だにその被害に苦しんでいる現状を把握し、全国の校長会に発信するために、平成26年度から被災地の視察、平成28年度からは他県にも呼びかけ原発視察並びに被災校との懇談会を行ってきた。

6年目となる令和元年度は、「福島の被災地の生の姿を見てほしい」「震災及び原発事故を風化させない」「風評に負けない」という強い思いを発信するために、全国の校長会に呼びかけ、原発視察と被災校との懇談会を実施した。そして、北は青森、南は福岡から1都10県の校長会が呼びかけに応じ、20名の校長先生方が参加してくださった。

本県からは、県校長会の佐々木義通会長を始め、事務局員18名が参加した。さらに、被災校との懇談会では、相馬支会・双葉支会の校長先生方12名も参加し、現状や課題について報告がなされた。

東日本大震災被災地懇談会 (相馬支会・双葉支会との懇談会)



平成31年4月1日現在の双葉地区8町村と相馬地区2市村の現状

- 【浪江町】平成31年3月31日に4小学校が休校、2小学校は避難先(二本松市)で継続。平成30年4月に地元で「なみえ創成小学校」を新設
- 【葛尾村】平成30年4月に地元で学校再開(それまでは避難先で開校)
- 【富岡町】平成30年4月に地元で2小学校が再開(通称:富岡校)
2小学校は避難先で継続(通称:三春校)
- 【楡葉町】平成29年4月に地元で2小学校が再開(それまでは避難先で開校)
- 【川内村】平成24年4月に地元で学校再開(それまでは避難先で開校)
- 【広野町】平成24年8月に地元で学校再開(それまでは避難先で開校)
- 【大熊町】2小学校は避難先(会津若松市)で継続
- 【双葉町】2小学校は避難先(いわき市)で継続
- 【南相馬市】小高小学校にて4校合同運営による開校
- 【飯館村】令和元年度末に小学校3校・中学校1校閉校。令和2年度4月に義務教育学校として開校予定

学校経営の現状や課題

ICTやテレビ会議システムを活用し、富岡校と三春校との遠隔合同授業をほぼ毎日実施し、交流を積極的に図っている。

ふるさと創造学で、川内村のよさを学習している。地域連携担当教員を活用し、地域との連携を深めている。

極少人数学級の課題解決のため、近隣の学校との合同行事や交流学习を積極的に行って、授業の充実を図っている。



避難の長期化による児童・保護者の心のケアは、これからも大切である。スクールカウンセラーの継続配置と派遣日数の増加をお願いしたい。

教職員の遠距離通勤、教職員の家族別居の問題等、様々な課題を抱えている。避難児童の対応等、業務の多忙化もあり、今後も復興推進加配の継続配置をお願いしたい。



校長会や教育委員会等の関係機関と連携を図りながら、新たな地域づくりと連動した「ひと・もの・こと」の再構築を図りたい。また、家庭環境や家族構成の変化等を踏まえた適切な支援も不可欠である。

被災地出身の教職員や勤務経験をもつ教職員が少ない現状がある。被災地に対する理解をもつ一定数の教職員が、特異な状況を抱える本地域の教育の充実に取り組んでもらう仕組みの整備を要望したい。

視察Ⅰ 東京電力福島第一原子力発電所



すると、一気に200 μ Sv/hも上昇していることに、一同から驚きの声が上がった。汚染地下水をくい止める約1.5キロに及ぶ凍土遮水壁、汚染水を1日約2千トン浄化処理する多核種除去設備（ALPS）、毎日百トン近くのトリチウムを含んだ水を貯めるための貯水タンク等を順次見学した。

原発では、毎日、約4千人が働き、廃炉作業を進めている。廃炉収束までの道のりはまだまだ続く。

視察Ⅱ Jヴィレッジ(楡葉町・広野町)

原発事故に伴い、Jヴィレッジは、平成23年3月15日から平成25年6月30日までスポーツ施設としては全面閉鎖し、国が管理する原発事故の対応拠点となった。以後もトレーニング施設としては活動閉鎖されていたが、平成30年7月28日より部分的に再開。同年9月8日には新しい全天候型練習場の利用も始まった。今回の視察参加者の宿泊場所となり、被災校との懇談会もここで実施した。



視察Ⅲ 浪江町立なみえ創成小・中学校



なみえ創成小学校・中学校は、浪江東中学校の校舎を改修し、小中学校併設した学校として平成30年4月に新たに開校した。

視察では、なみえ創成小学校長 馬場隆一先生に、校舎案内をしていただき、図書館と一体となったメディアルームや人工芝のグラウンド、地域の方たちとの触れ合いの場となるクラブハウスなどを見学させていただいた。

その後、なみえ創成中学校長 半杭千歩先生から、浪江町の状況や「なみえ創成」という新たな学校への想いをご説明いただいた。「子どもたちの生きる力と夢を育み、地域の未来を切り拓く学校」を基本理念として、なみえ創成に集う子どもだからこそ、創り出せる「学び」の姿を熱く語っていただいた。

視察Ⅳ 浪江町立請戸小学校 被災校舎



請戸小学校は、海岸から約300メートルのところであり、東日本大震災では、一階の天井まで津波に襲われた。しかし、児童や教職員は近くの大平山に避難し、全員が無事だった。

視察では、馬場先生と浪江小学校長 木村裕之先生の案内で、津波に襲われ無残な姿となった校舎や体育館を見学した。また、地震発生後から大平山へ避難するまでの当時の校長・教頭の速やかな判断、教職員の連携体制、児童全員がお互いに励まし合い、頑張って大平山を駆け上がった様子など詳しく教えていただいた。

県外より参加した方々からの感想・応援メッセージ

- ・**全連小事務局からの参加者**：「百聞は一見に如かず」との言葉のとおり、福島第一原発の廃炉作業の様子、大津波そして原発事故により、今までの日常が止まり、そこから復興への道を少しずつ歩まれている皆様の様子を伺うことができました。今まで、校長会でのお話やマスコミ報道等を通して、自分なりに思っていたことを確かめられたり新たに知り得たりすることができました。そして、私は今回の視察を通して知り得たことを、いろいろな形で伝えていくことが私にできることと改めて思いました。
これからの復興の道のりは長いものと思います。しかし、ゴールを目指して私たちは一步一步、歩みを進めねばなりません。そのためにも私たちのみならず、次の世代の中心として活躍する今の子どもたちを育てていくことが、今の私たちの役目であると思っています。その役目を少しでも実現できるよう努めていきたいと思っています。
- ・**青森県からの参加者**：今回は、福島第一原発や被災された地域・学校等を実際に自分の目で見て肌で感じる機会を与えていただいたことに対しまして心から感謝いたします。
テレビや新聞等の報道では、復興がどの程度進んでいるのかがわかりませんでした。今回の視察で、被災された地域の現状を驚きと衝撃をもって知ることができました。特に、帰還困難地区については、側道が閉鎖され、沿道の建物もバリケードが張られていました。壁もガラスも壊れてしまった自動車販売店や商品が残ったままの衣料品店を見たときには、原発事故の悲惨さを感じました。また、請戸小学校の被災校舎には、津波の被害の大きさを実感させられるとともに、自分が想像していた以上のものを感じました。
- ・**秋田県からの参加者**：被災校では、限られた教育環境の中にあつて、一人一人の子どもたちの確かな育ちにつながるようにと、様々な工夫をしながら教育を推進していることに頭が下がる思いです。今学んでいる子どもたちが「ふるさとに育ててもらった」という思いと誇りをもって、将来たくましく生き抜いてほしいと強く願っています。
- ・**埼玉県からの参加者**：「3.11は終わっていない」「風評を許さない、風化をさせない」という福島県の先生方の強い思いに改めて気づかされることばかりでした。今回の視察並びに懇談会で学び得た成果を埼玉県内の各校長へ伝えていきたいと思っています。
日本の未来をつくる子どもたちを信じ抜き、皆様とともに充実した学校経営を貫くことを宣言し、御礼の言葉に代えさせていただきます。
- ・**新潟県からの参加者**：新潟県には、依然として約2,400人も福島県からの避難者がおられる。その半数にのぼる児童生徒の心に寄り添った支援を行う上で、今回見聞したことは大いに役立ちました。また、大震災の記憶を風化させないことは、子どもたちに持続可能な社会を形成する必要感を高めることにもつながるものと考えます。
- ・**福岡県からの参加者**：「日本の時はわずかしか動いていない」ということを強く感じた。震災から約8年半が経過した今でも原発構内で高線量の場所があり、6号線沿線には壊れたままの店舗や家屋が連なり、家に戻りたくても戻れない方が多数いらっしゃる。その現実から、被災当時とどれだけ変わっているのか。そして、地震・津波・原発事故によってふるさとを奪われた人々の気持ちのことを強く考えさせられた。そのような中、一人一人の子どものために懸命に頑張っている被災校の先生方に敬意を表したい。「福島の復興なくして日本の復興なし」と発信していきたい。

これまでの被災地視察並びに懇談会の経過

福島県小学校長会では、東日本大震災後、本会役員が被災地並びに被災校の現状を把握してきた。平成26年度からは継続して被災地を視察し、そして、懇談会を実施してきた。これまでの経過は、以下のとおりである。

- 平成26年度 7月：富岡町・楡葉町・双葉町の避難先校の視察
8月：全連小役員とともに葛尾小、富岡一・二小三春校、浪江小・津島小（二本松市）の視察
10月：大熊町の避難先校の視察
- 平成27年度 9月：小高小、県環境創造センターの視察
- 平成28年度 8月：全連小役員、岩手・山形・宮城の校長会役員とともに富岡一・二小三春校と原発の視察
11月：相馬支会・双葉支会との懇談会
- 平成29年度 8月：全連小役員、東北の各県校長会役員とともに、原発と楡葉南・北小の視察
11月：相馬支会・双葉支会との懇談会
- 平成30年度 6月：相馬支会・双葉支会との懇談会
11月：全連小役員、東北・関東地区、新潟の各県校長会役員とともに富岡一・二小富岡校の視察、並びに相馬支会・双葉支会との懇談会
- 令和元年度 6月：相馬支会・双葉支会との懇談会

※ 視察並びに懇談会で出された被災校の現状や課題・要望等については、福島県教育庁との教育懇談会等の折に確実に伝え、改善が図られるように強く働きかけてきた。

座 談 会 「疾風勁草」

東日本大震災、原発事故から10年目を迎える今

福島県の教育を考える — 我々がつなぐべき思いを —

□開催日 令和元年11月27日(水)

□会 場 伊達市立保原小学校 講堂

□パネラー

伊達市立保原小学校長 佐々木 義 通 (福島県小学校長会会長)

郡山市立芳山小学校長 吉 川 和 夫 (福島県小学校長会副会長)

会津若松市立日新小学校長 佐 藤 裕 哉

相馬市立日立木小学校長 加 藤 裕 紀

富岡町立富岡第一小学校長 岩 崎 秀 一

いわき市立泉北小学校長 水 谷 大

□コーディネーター

福島市立福島第三小学校長 佐 藤 秀 美

(福島県小学校長会事務局長)



【会長挨拶並びに趣旨説明】

佐々木



東日本大震災・原発事故から間もなく9年を迎え10年目になろうとしています。この間、県内各小学校にあっては「学校は復興の最大の拠点」の合言葉の下、校長は「安全・安心」を最優先にリーダー

シップを発揮し、復旧・復興に取り組んで参りました。結果、昨年度被災地の5つの市町村において地元での小中学校の再開、さらには各学校では震災前とほぼ同程度の教育活動ができるようになってきました。

しかしながら昨年度末の時点で、県内外に避難されている方は約4万人です。学校にあっては県内外で避難を余儀なくされた子どもたちも含めて、学力の低迷、体育・運動能力の低下、肥満などの健康課題、心の荒廃、いじめや不登校、児童虐待の増加などの問題も顕在化しています。さらに再開した一部の学校では、極少数人数という状況が今後も続くといったことが予想されています。

このような中において私たち県小学校長会は校長同士のネットワークを生かし、協力し合って、復旧・復興に努められるようにしてきました。特に県小学校長会では、震災直後に特別部会を設置

し、教育機能の回復に向けての活動、東日本大震災の記録の累積などを行ってきました。そして、その後平成24年4月には「東日本大震災記録集 ふくしまの絆」の発行、そして29年3月にはそのⅡが発行となったことは皆さんご承知のことと思います。また外向きな発信としましては、全連小及び東北連小理事会などで、被災県の状況として特に相馬双葉地区の厳しい現状について訴えてきました。

さらに、本県独自の活動としては、平成28年度から原発視察や、被災地の視察などを行ってきました。その際、東北連小の校長先生方にはご案内を差し上げてきましたが、平成30年度からは福島県隣県の関東まで広げ、それから被災地区とは年2回懇談会をするようにして参りました。今年度は11月6・7日に行いましたが、東北地区の校長会だけでなく全連小からは副会長、さらには福岡・名古屋の校長会からもご参加をいただいて、特に風評、風化の現状について訴えてきたところです。

ところで最近は大量退職、新任校長の増加、それらに伴いまして、当時の校長先生方が苦勞してきたこと、さらにその取組の記憶などが薄らいできているのが事実ではないでしょうか。つまり若手の校長先生方に対し、10年目を迎えようとし

ている今だからこそ、訴えるものがあるはずだと考え、今回の広報の特別号の発行に至りました。

本日はこのような趣旨で、座談会に各地区の代表の皆さんにお集まりいただき、座談会を開催させていただきました。是非各校長先生方がお持ちの貴重な経験を本県の小学校教育の進展、ひいてはこれからの本県の子どもたちのため、熱い思いを語っていただければ幸いです。

【第Ⅰ部】

佐藤秀 本日は二部構成で行います。まず第Ⅰ部は震災後9年間の現状と課題についてということで、前回の座談会が震災から約6年後に行われましたので、今回はそれ以降のを中心としながら、現在までの期間どのような状況であったのかなどをお話いただきます。第Ⅱ部につきましては、震災から学んだ教訓や震災を風化させないための取組、未来を築く子どもたちを育てる今後の教育の在り方などについて、先生方の思いやお考えを存分にお話いただきたいと思ひます。

まず富岡第一小学校の岩崎先生お願いします。

岩崎 原発で被災しています双葉郡8町村の現状について、お話いたします。震災前は17校ありましたが、震災後6年を過ぎ、現在14校となっています。そのうちの7校が地元に戻っての再開、あと7校が避難先での継続再開という状況です。地元に戻って児童数100人を超えているのは広野小学校のみです。次に多いのが楡葉南・北小学校で、各々80名くらい、川内小学校が30数名です。他の浪江小学校、葛尾小学校、富岡第一・第二小学校富岡校は全校生20名弱です。したがって1学年1名から3名の極少数で学校運営を行っているわけです。これから先の見通しですが、まず今年度末に浪江小学校が、令和2年度末には津島小学校が、令和3年度末には富岡第一・第二小学校三春校がそれぞれ休校になります。ますます学校数が減っていくという現状があります。それに伴って、2校を兼務する校長もおります。たとえば楡葉の南・北小学校は1名の校長で運営していますし、校

長数がどんどん減っていくという状況です。

それから、なかなか難しいのは双葉郡出身の管理職者が非常に少ないということです。双葉郡の小学校は他管内からおいでいただいている校長先生方のお力を借りて教育活動を行っている現状です。

佐藤秀 双葉郡の厳しい状況についてお話をいただきました。校長も世代交代がどんどん進んでいきますが、まだまだそういう厳しい状況にあるということのをこれからの若い校長先生方に伝えていく必要があると思ひます。

では続いて、日立木小学校の加藤先生お願いします。

加藤 私は平成24年に、飯館村の飯樋小学校へ新任教頭として赴任しました。その年は川俣町にプレハブの校舎を建てて、草野・白石・飯樋小学校3校で移転した時で、3校の教職員で、常にどうやったら一つの学校として成り立っていくのか、ということを考えていました。

その時、様々な支援をいただきました。中でも出前授業がとても充実していました。例えば南極の昭和基地と学校を結んで、子どもたちに昭和基地の隊長さんとお話をさせていただきました。この福島から14,000kmも離れている方とお話ができて、南極の様子を知ることができました。

それから、飯館村は子どもが真ん中の教育「まていな教育」を進めていましたので、移転当初はプレハブ校舎が、腰板であったり、教室や廊下・階段は鉄板むき出しだったのが、どんどん木を貼って素晴らしい校舎へと変わっていったように、施設だけでなく様々な面で子どもたちのことを親身に考えて取り組んでいました。

飯館村は多くの子どもたちが避難してしまったのですが、私が行った2年目の時には全国学力調査でよい成績を収めて、県の方からも「どうやったの、実践を出してください。」と聞かれたこともありました。

生徒指導面でも、赴任した1年目は、子どもたちも保護者の方も心に不安を抱えていて、相談の電話があると、1時間から1時間半くらい話を聞くことも度々ありました。しかし、親身になって子どもたちのことを考えて対応することによって学力が向上したこともあって、2年目はそういっ

たことも一切なくなりました。

現在の相馬の状況ですが、飯舘村は、来年度から義務教育学校となるため、現在9年間の教育課程を作成中だということです。小高区4小学校は小高小学校で現在教育活動を行っていますが、バス通の子が大半で、体力向上が非常に課題だとのこと。そして最後に磯部小学校ですが、町の大部分が流されてしまい、当時200名位いた児童数が現在35名まで減っており、学校がなくなったらもう人が消えてしまうのではないかとという状況なのだそうです。まさに「学校は復興の最大の拠点」という役割を担っているという現状です。

佐藤秀 2年目に学力が向上した、それから生徒指導面でも問題が少なくなったということです。その原因をどのようにとらえていらっしゃいますか。

加藤 子どもたちもよく頑張ったのですが、教職員がすごく一つにまとまっていたからだと思います。川俣に避難しているにもかかわらず、小教研の相馬地区の算数の授業公開の研究校ということで、その当時の校長 和田節子先生が絶対川俣で公開すると断言されました。先生方は最初「避難してるのにやるのですか。」ということを経験先生に話しましたが、「絶対やる。」ということで、職員の心が一つになりました。確かに避難していますが、研究することで、子どもたちに学力をつけるのだというように、少しハードルを上げたことが、効果につながったのではないかと思います。

佐藤秀 未曾有のピンチの中、先生方の思いが結集してそれが子どもたちの学力面でも生徒指導面でも活かされていったということですね。

次に泉北小学校の水谷先生、お願いします。

水谷 いわきは非常に広いので、2011年の3.



11の被害の状況が、都市部、山間部と、太平洋沿岸部の被害は全く別物です。私がある当時勤めていた豊間小学校では、今お話いただいた日立木小学校の加藤

先生とバディでした。私が校長で、加藤先生が教頭、一緒になって汗をかきかき豊間のあたりを駆け回っていたことを思い出しました。今、加藤先生のおっしゃられたことをものすごく身にしみているのは、苦しかった時の方が、物的な環境はなかったけれども、ソフト面で心的な、ものすごく高まる環境にあったのではないかと、今の

お話を聞いて全く同感に思いました。

豊間小学校は太平洋沿岸部に位置しています。当時の就学援助の対象者の割合は5割以上でした。バスに乗っての通学を余儀なくされていた子どもが、96%でした。ほとんどの子どもたちが6年間通学路というものを知らずに過ごしました。そういう子どもたちと今の私のところの子どもたちとは違うということをもっと分かっていただけて、豊間小学校の変容ぶりをお話させていただきます。

豊間は当時、机一つ分くらい地盤が沈下しました。そこに津波が来たので、世帯数で言いますと豊間地区で70%、薄磯地区で85%ぐらい津波被害を受け、ほぼ壊滅と言ってよい状況でしたので、通学路は心配で歩かせられないため、小学生も中学生もバスで通わざるを得なかったのです。

今は小学校の後ろの40m位の高い山を半分切り崩して新たな土地を作りました。その土地と被害にあった集落の土地を「換地」と言って、交換し合って多くの方が移りました。一時的に災害公営住宅に入った方々も現在は高台に移るか、自分でアパートを借りるかして自助努力で生活できるようになってきたというような状況で、ほとんどの児童生徒が徒歩で通学できるようになってきました。

学力、体力がどうなったかということですが、体力は一時的にぐっと落ちました。そこで、「豊間アカデミー」という7校時目のコマを作ってPTA主催で、体育や習字や英会話、体操などいろいろな授業を行いました。そのおかげで学力も向上しました。これから1ポイントずつ上げていこうということで取り組みました。4年目に後任の校長先生に聞いたら、NRTの結果が3年前と比較して10ポイント上がったとのことでした。それは7校時目授業の成果もあるだろうし、先ほど加藤先生がおっしゃられていた、苦しかったハングリーだったという時、子どもも親もコミュニティも先生もものすごく上のベクトルに向かう力が起こっていたこともあると考えています。

佐藤秀 加藤先生、水谷先生のお話を聞いて、いずれも極めて困難な時に先生方が知恵を絞って、正に最適な対応をみんなで模索していたことがわかります。そして、校長先生方のリーダーシップがあり、さらに地域の力もありと、教育の本質をうかがうことができました。

加藤 豊間小学校では、地区小教研の国語の公開

を行いました。駐車場もあまりない中でしたが、小さい空き地を借りながら、何とか公開できました。その当時、水谷先生だったのですが、たくさんの先生方が集まる国語の公開をもってこることにこだわっていました。結局、300人以上の先生方が集まり、全学年を公開しました。先生方は、3つの学年ぐらいの公開でよいのではという中、水谷先生は全学年の公開にこだわっていました。先生方のハードルを高くすることで、結果として豊間小の子どもにとってはよい効果を生んだようです。

水谷 そういう中で豊間小が小教研の発表をやり切れたという力の源は、何だったのかと考えた時、困難な時こそ、知恵や工夫が生まれてくるものだという事例の一つだったと思います。

佐藤秀 続いて中通り、郡山の芳山小学校、吉川先生をお願いします。

吉川 私は東日本大震災が発生した当時、市役所隣のニコニコこども館にある総合教育支援センターに勤務していました。

今回の機会をいただいたので、当時のことを振り返ってみました。結論から先に言うと、震災直後あるいは震災後の前半は、「安全」というキーワードになるように思います。そして、後半は今も含めてですが「安心」というキーワードになると思います。

震災直後、郡山市の方針で入学式や卒業式、学校再開に向けた対応などは、校長会と教育委員会が一緒に考え、実践していました。郡山市は広いので、市内中心部など放射線が高い所もあれば、会津に近い湖南地区など、線量も低く被害がほとんどなかった所もあります。そのような違いはありましたが、震災直後はすべての校長を招集し、それぞれの校長の意見を聞きながら、教育委員会の施策を進めました。したがって、入学式も校舎や通学路などの関係から例年より一週間遅らせました。被害のほとんどなかった湖南地区も同様に入学式を一週間遅らせました。このように郡山市では、全体として同一步調で進めたことが特徴的なことだったと思います。

さらに、震災直後に市と教育委員会と市医師会とで、プロジェクトチームを組んで、子どもたちの心のケア・体のケアに当たりました。それは、今でも続いています。そんな中で、「安全」と「安

心」は違うのだということを思わせる保育園の保育士の話があるので紹介したいと思います。放射線量も下がり、表土除去をして、外での遊び「3時間ルール」なども解除されたにもかかわらず、ある保育園の子どもが庭に出て、土をさわっていました。すると、室内にいた別の子が「先生、あの子、お庭の土をいじっています。土をいじるのは悪い子なんだよ。」と先生に言ったということです。本来土に親しんで遊ぶ子どもたちであるべきなのに、先生はその言葉を聞き、心を痛めたそうです。家庭の不安を反映したこの言葉に、「安全」と「安心」は違うのだと痛感させられました。

それでは、「安心」を得るためにはどうしたらよいのでしょうか。郡山市で行っていることを紹介したいと思います。まずは、現在も続けていることですが、運動能力や生活習慣の調査を1年生から6年生まで市内すべての子どもたちに実施しています。調査結果からは、肥満の問題や運動能力の低下などがしばらくの間、指摘されていました。しかし、次第に改善傾向が見られてきています。次に、安全対策のために校舎の耐震化工事を進めており、これも「安心」につながってくると思います。さらに、給食の食材検査や全食（まるごと）検査を実施しており、検査限界値以下の厳しい設定のもと、現在も安全な給食の提供を進めています。

今後も大きな課題となってくるのは、この「安心」をどう担保するかということだと思います。保護者の中には、まだ不安をもっている方もいます。大丈夫だと言いながらも「安心」までつながらない保護者もいます。「安心」のあとに来るのは、「風化」だと思います。郡山市で継続して行ってきたこれまでの対策は、今後も長い期間続けていかなければならないと強く思っています。

佐藤秀 吉川先生からは「安全」と「安心」というキーワードで郡山市の取組をお話いただきました。吉川先生にお聞きしますが、「安全」と「安心」を定義付けるとしたらどのようなになるでしょうか。

吉川 「安全」は目に見える対策で、「安心」は目に見えないものだと思います。それでは、目に見えない「安心」をどうつくっていくかということですが、それは震災直後から一貫して続けている対策をこれからも続けていくことだと思います。

100%安心ということは、ないのかもしれない

せんが、少しでも100%に近づくような安心して学べる環境づくりに力を尽くしていきたいと思えます。

佐藤秀 「安心」には、長い時間が必要で、継続が大切だというお話をお聞きしました。改めて各学校で行っている給食検査などの取組の重みを実感させられました。

それでは、次に会津地区、日新小学校の佐藤先生よろしくお願ひします。

佐藤裕 会津も大きな揺れに見舞われましたが、



津波などを受けた浜通りの地域と比べたら、大したことではありません。

しかし、会津地方でも風評被害は大きかったと思えます。たとえば、修学旅行

で会津へ来る学校が少なくなったり、農作物の売り上げの低下があったりしました。また、新潟との県境にある沼沢湖では、線量が高いこともあり、3年前までヒメマスを探ることができませんでした。

会津でも地震というより、原発事故の影響が大きかったようです。当時、喜多方では農業科というのがあって、農業の学習をしていたのですが、すべて作物は1kgごとに線量を計って安全性を確かめてから食べていました。また、学校の校庭も線量が高い所があったので土を入れ換えたりしました。湯川村の教育長さんが自らスコップを持って、学校の線量の高い所を掘っていたこともありました。そんな教育長さんの姿を見て我々も頑張らなければならないと思いました。

さらに、子どもたちの体力面の低下が見られました。特段、運動制限をしたわけではありませんが、県平均や全国平均から見ると下回っている状況です。これは会津地方全体の課題だと思えます。

会津に避難している大熊町の熊町小学校と大野小学校については、旧河東第三小学校での開設となりました。震災当時には363名の児童が在籍していましたが、現在は11名で、極少数人数での教育活動が進められています。現在、2022年度を目途に大河原地区に新校舎を建設し、地元での再開を目指しています。

会津若松市内の学校との交流をしたり、会津ならではの行事などを積極的に取り入れたりしながら、充実した教育を展開しています。熊町・大野

小学校の阿部裕美先生が、会津若松市教育委員会をはじめ多くの会津の方々の支援に感謝の言葉を述べていらっしゃいました。

今後、地元での校舎再開に向けて準備が進んでいるというお話を伺い、一日も早い再開を願うところです。

佐藤秀 会津地区の状況をお聞きしましたが、浜通りだけが被災地ではなく、今回の東日本大震災とそれに伴う原発事故は、福島県全体が被災地なのだというのを改めて実感させられました。そして、そういう中にあっても会津に避難している大熊町の小学校に対して、会津若松市教育委員会をはじめ多くの先生方が支援している話も聞かれ、素晴らしいことだと感じました。

先日の新聞に大熊町の新しい学校建設のことが記事として書かれていました。それによると学校を「多世代が学ぶ拠点」にしたいということでした。みんなで知恵を出し合って、魅力的な学校を作り上げようとしているのですね。

避難している学校への支援という話がありましたが、双葉郡の学校の中には、今だに避難している学校が7校ある状況ですが、地元との協力体制という点ではどうだったのでしょうか。岩崎先生、いかがでしょうか。

岩崎 避難先の学校では、子どもたちは自分の家を失い、アパートや仮設住宅、復興住宅などから学校に通ってくる状況でした。その時、先生方はこうした子どもたちをどうしようかと考えることに必死で、外に目を向けることができる状況ではありませんでした。

しかし震災後5年が経つと、子どもたちにとって「ふるさと」が避難先なのか、浜通りなのか分からなくなってしまいう状況になりました。ふるさとを二つもつことになってしまったからです。

そこで、先生たちは外に目を向け始め、避難先の様子を調べたり、避難先の近隣の学校との交流を始めました。

一方、富岡町に戻った子どもたちは地元のことを全然知りません。先生方も知りません。ゼロからのスタートです。昔の富岡町のことを知ることが大切ですが、より大切にしたいのは、今、富岡町は復興に向けどのように進んでいるのか、復興に向け立ち上がっている人やその人の思いを子どもたちに伝えたいと思っています。そうすることで、子どもたちが将来生きていく上での糧になるに違いないと思っています。とにかく地元に戻っ

た学校では、地域とつながった教育活動を推進していこうと考えています。

佐々木 岩崎先生、「ふるさと創造学」について紹介していただけないでしょうか。

岩崎 震災直後に発足した「ふるさと創造学」は、自分たちのふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持ち、そしてふるさととはどういうものなのかを知ろうということからスタートしました。ですから、避難先でふるさとのいろいろな方々を呼んで、自分たちが生まれたふるさととはこういうものだというのを学習しました。それが「ふるさと創造学」です。

しかし、最近は変わりました。子どもたちは地元の復興状況を知り、今のふるさとは、どんな方向に進もうとしているのか、どんな町にしようとしているのか、そこに関わっている人はどんな人でどんな想いをもっているのかを調べます。そして、それを踏まえ、自分たちには何ができるのかということを考える学習が変わってきています。

佐藤秀 私も「ふるさと創造学」のサミットに何度か参加させていただきました。その時に、富岡一中の女の子に「ふるさと創造学を学習して、あなた自身が一番変わったことは何ですか。」と尋ねた時、その女の子は「富岡町がすごく大切な町だと思えるようになりました。大好きになりました。」と答えてくれました。その後、ふるさとをこんなふうにしたいという子どもたちのアイデアが出てくるような学びの姿が見られました。

こうした双葉郡の「ふるさと創造学」の取組から、私たちは多くのことを学ばなければならないと感じました。

水谷先生にお聞きします。双葉町の学校は現在もいわきに避難していますが、いわきの校長会として双葉郡を支援しているとお聞きしています。具体的に教えてください。

水谷 ハードの支援としては、学校施設をお貸ししていることがあります。

また、陸上競技大会を双葉町や檜葉町と一緒にやったりすることもありました。

佐藤秀 今まで先生方のお話をお聞きして浮かんだ言葉があります。それは、「疾風に勁草を知る」という言葉です。困難や試練に直面した時にはじめてその人の強さを知ること。強い風が吹いた時に立っている草。それが本当に強い草だということがわかる。まさにそれぞれの地区で先生方が英知を結集して子どもたちへの固い信念を胸

に頑張ってきたからこそ、今があるのだと思います。

佐々木 お話をお聞きして感じたことを申し上げたいと思いますが、その前に、今回の座談会を開くに当たり、現在、二本松市教育委員会教育長の丹野学先生にお会いしてきました。丹野学先生は、震災後平成22年度県小学校長会会長だった方です。私は、当時の様子や校長会の対応などについてお話を伺ってきました。震災当時のことについては、4点にわたってお話されました。

1点目は、とにかく学力が低下したということです。そのことは子どもたちに本当に申し訳ないと思っているということでした。

2点目は、当時は大変な学校もあればそうでない学校があったので、あまり被害のなかった学校の先生をボランティアで被害の大きな学校に行かせるようなことができないか、いろいろ模索したのですが、そういうシステムは結局できずにもどかしさを感じていたということでした。校長会としてチームワークを生かした対策が取ればよかったと思われたとのことでした。

3点目は、丹野先生は当時福島第四小学校の校長で、隣接する福島市教育実践センターに相馬地区の校長先生たちが20人くらい配置となったということで、それぞれの校長先生たちは、自分の携帯電話で子どもの居場所確認などを行っており、一人の携帯通信料金は月額相当な額になったはずですが、その額を厭うこともなくしっかり対応していた校長先生方は立派だったということでした。

4点目は、とにかく当時の被災地の校長先生方をはじめ、職員の方々は決して愚痴をこぼすでもなく、朝早くから夜遅くまで、一生懸命頑張っていた姿が印象に残っており、苦情や要望などにもしっかり対応していた姿が素晴らしかったということでした。

さらに、当時を振り返って校長会あるいは校長として何が必要だったかをお聞きしたところ、2点お話してくださいました。

1点目として、校長は地域との関係性をつくらなければならないということでした。それがなければ復旧・復興はあり得ないとのことでした。

2点目として、県校長会は県教委との関係性もしっかりつくっておき、パイプを太くしておかななければならないということでした。そして、各支会にあっては、市町村教育委員会との関係性をつ

くることがとても大切なことだと思ふとのことでした。校長会としての取組はネットワークを生かすことが大切で、事務局としては、マンパワーを活用することも大切だということです。ある教育長さんから「あなたたち校長は、とにかく見に行くことだ。」と言われ、チームを組んで双葉や会津に足を運んだとのことでした。そして、感じたことは、それぞれの支会で助け合って復旧・復興に向け努力をしていたということだったそうです。

最後に、情報がない中で学校は何ができたのかということについて2点話されました。

1点目は、とにかく子どもを守ること。そのためにみんなが一生懸命やっていたということです。

2点目は、地域と協力すること。地域と共に子どもを守ることが大切だということでした。

以上、丹野学先生から震災当時の校長会や校長の様子についてお聞きしたことを紹介しました。

これまでの座談会での話や丹野学先生の話を受けて、私が感じたことをお話しします。

1点目は、岩崎先生の話にあったように、福島県は震災ばかりでなく、原発事故が加わっており、特殊な中にもさらに特殊な状況なのだということが踏まえる必要があると思います。まだまだ復旧・復興にたどり着いていません。それにはものすごい時間がかかるのだと思います。今の子どもたちが生きている間でさえ、終わらないのではないかと思います。そうした現状を踏まえ、風評・風化に対しては、今後とも双葉地区や相馬地区からの情報を得ながら、校長会として強く発信していくことが大切だと感じています。

2点目は、震災当時、学力低下・体力低下が見られました。しかし、福島県の先生方は何もなかったわけではなく、よく頑張っていたということです。先ほど豊間小では、震災直後下がった学力も震災後確実に学力向上が図られてきているという話が出され、感心させられました。

3点目は、吉川先生の話で、「安全」は目に見えるもの、「安心」は目に見えないものということがありました。郡山市は、「安全」そして「安心」を得るために、震災直後から校長会と市教委、市医師会が連携して動いていたことが素晴らしいことだと思いました。未だに保護者の中には不安を抱えている方もいます。これらの不安を解消して安心につなげていくことが校長あるいは校長会の責任であり役割だと思いました。

最後に、会津の佐藤先生や富岡の岩崎先生から話がありましたが、避難先でも地元でもそこにいる校長同士が連携を取り合って、他から来た方たちを快く迎え入れている姿が素晴らしいと思いました。さらに、それを踏まえて自分のふるさとを知っていこうとする「ふるさと創造学」などの取組も素晴らしいと思いました。

第I部では、それぞれの地区のこれまでの現状をお聞きしましたが、それぞれ違うのだということや改めて認識するとともに、今だに復旧・復興に向け動いているのだということ、そしてその動きを止めてはいけないのだということ強く感じました。大変意義のあることだったと思います。

【第II部】

佐藤秀 第II部は、「震災から学んだ教訓、または震災を風化させないための取組」、併せて「未来を築く子どもたちを育てる今後の教育の在り方」について未来志向で校長先生方のお考えをお聞きできればと考えております。

後半はまず、吉川先生お願いします。

吉川 「風化」させない取組。先ほどの「安心」ということがありましたが、「安心」というのと「風化」というのは非常に境界が難しいところだと思いますが、そういう意味ではご紹介したいのが、郡山では医師会と、教育委員会と校長が一緒になって、「郡山物語」という本を編集したということです。これは、医師会や、市、教育委員会とか、学校の現場の取組を収録して残すことで風化を防ぎ、次世代に教訓を語り継ごうという意図で発刊しました。

それから、子どもたちが震災から学んだことについて、道徳の副読本資料という形でまとめた「未来を拓く心のブック」という、小学校版と中学校版と市民版というのがありまして、それぞれ、震災から学んだこと、それから震災から得たものというようなテーマで詩や作文を募集し、応募作の中からいくつかをここに載せました。今でも各学校では道徳資料あるいは子どもたちの学びの資料として使っています。

子どもたちはこの震災でいろんなことを学んだと思いますが、ただ一人で乗り越えたわけではなくて、多くの大人たちや、仲間と一緒に乗り越えてきたのだなということやこの文面から読み取ることができました。これは先生方にも言えることで、先生方もそれぞれが頑張り、一緒になって様

様な困難や課題を乗り越えてきました。厳しい状況の中でも助け合い、励まし合ったことによって支えられている自分とか生かされている自分に、私たちも子どもたちも気付いてきたのかなと思います。

ここで、副読本の作品を紹介したいと思います。はじめに小学校3年生の「つよさ」というタイトルの詩です。

つよってことは
まけないってことじゃない
つよってことは
なかないってことじゃない
つよってことは
まけてもあきらめないこと
つよってことは
ないてもまたわらえること

子どもの心の動きだとか震災や事故によって一人一人が辛い思いをしたけれども、乗り越えてきたことがよく分かる文章かなと思います。

次に5年生の作文です。「ぼくの気持ちが変わった時」というタイトルです。

小さな風とともに大きな地震が起きた。地面がものすごくゆれた。

津波がざぶんざぶんと町におそいかかるのをテレビで見て、すごくこわいと思った。その様子は言葉では言い表せない。たくさんの命が目の前でうばわれてしまったから。さらにその後起こった原発事故。ぼくたちは外で遊ぶこともできなくなった。

この日からぼくの気持ちが変わった。家族は何よりも大切なのだと。家族だけじゃなく、ぼくたちをひなさんさせてくれた登校班の班長、家の人が来るまで見守ってくれた先生、食べ物に分けてくれた近所の人たち。たくさんの人に支えられ、はげまされて、ぼくたちは過ごさせてもらっていることを知った。

ぼくも支えてもらい、支えていけるようになりたい。
(抜粋)

この言葉の中には子どもたちが私たちに投げかけている大切な学びがすごく多いなと思いました。

最後、葛尾村から郡山市に避難してきた3年生の作文です。「おひっこし」というタイトルです。

かつらお。わたしはかつらおという村にいた。しぜんがいっぱい、空気がとってもきれい。森の中でキャンプ、パーベキュー。ほいく園とようち園と小学校、みんなつながっていてとってもなかよし。
ある日、地しんがおきた。ガタガタガタ。たてに

ゆれたよ。物が落ちてきたよ。外へにげたよ。

「こわいよう。」

「お母さんに会いたいよう。」

いっぱいいないた。こわくてこわくて、しかたがなかった。みんなお母さんにむかえに来てもらった。おばあちゃんの家へおひっこしをした。わたしはホッとした。

夜、ねているとよしんがきた。ねてもねてもすぐおきてのくりかえし。何日も何日もよしんがつづいた。今、思い出しても胸がドキッとする。ドキドキ、ドキドキ、ドキッとする。

こおり山におひっこしをした。また、おひっこしをした。こおり山はいいところ。友だちがいっぱい。やさしい人がいっぱい。でも、でも、でも……。かつらおに帰りたい。かつらおにおひっこしできたらしいな。

非常に、子どもたちの本当の心の中が見える作文だと思います。これが、風化させないための一つの大きな記録で、私たち校長も含めて活用していきたいと思っているところです。

佐藤秀 震災の中で子どもたちはいろんなものを失ったわけですがけれども、そこから大切なものを学んでいるという側面もある、また、そうした記録をしっかりと次代につないでいくことが大事だというお話でした。

では、続いて佐藤先生、お願いします。

佐藤裕 私は、体験を通して学ぶというのは大切だと思います。例えば、いわき海浜自然の家到会津から出かけて行って浜の様子を見るときか、あるいは通勤福島を使っていろんな知識を得るときか、また、新しく開館する東日本大震災原子力災害伝承館なども活用して、会津から出かけて行ってその地区の方々の苦労とか、大変な思いを学ぶことが大事だと考えています。

会津も、農家の方々の風評被害について、身近な方々の苦労話を伺うようなことを学校教育の中で取り上げていくことが、震災を風化させないことかと思っています。

佐藤秀 会津でも意識的に学ぶ機会を設けていくことの大切さが校長先生のお話の中にもありました。具体的にどのようなことでしょうか。

佐藤裕 いわき自然の家へ行って、その帰りあちこち、浜の様子を見たりということで帰ってきました。すごかったという子どもたちの思いがあったし、我々が意図して大変なことがあったことを忘れないようにしていくことが大事だと思いま

す。他には、近隣に農家の方を呼んで例えば柿農家などは風評被害を受けて本当にひどかったの、どういう風な苦勞をしたかとか、どういう風に立ち直ったかなどについては社会科や総合で勉強していくことが大事だと思って取り入れています。

佐藤秀 佐藤先生の話をお聞きして、新しい学習指導要領総則の中に「災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」が位置付けられたことを思い出しました。東日本大震災などを背景として総則に盛り込まれた意義は大きいと思います。やはり福島県だからこそ、しっかり指導していかなければならないと思います。

佐藤裕 会津の中でも、地区と連携して防災避難訓練をする学校も出てきました。土砂災害とか洪水などもあるので、震災の教訓を生かして、そういう取組というのもしょずつ増えてきているところですよ。

水谷 風化させないためにという一つの事例で、阪神淡路大震災や新潟県中越沖地震が起こった時、3年後から5年後には必ずPTSDを発症するというデータを、我々は知っていたということです。だから福島県は緊急カウンセラーをすぐに派遣しました。つまり、阪神も新潟もデータとして後に残せるものは残しておこうという取組がしっかりとされていたから我々もそれを生かし切ることができたのです。

自分の学校にもPTSDの子どもたちがいました。その時私たちは、Post Traumatic Stress から Post Traumatic Growth といういわゆる心的外傷後ストレス障害から、心的外傷後成長に換えるという手法を学んで、日常の授業の中で、様々な取組をしました。フラッシュバックして海馬に焼き付いた記憶の上に、取材をして、この町でこの土地で一体何が起こって、どんな人がどんな風に汗を流してきたかを知ることによって正しい記憶を海馬に上書きさせていくのです。そうすることによって、PCのデータがそうであるように、なくなりはしないけど、下のデータが見えなくなる、いわゆるそれはPTSDのフラッシュバックを防ぐことになり、PTGに繋がっていくのです。こうした取組をいわき支会では何年も掛けてしてきました。

また、校舎については中学校が流されて、小学校しか残ってないから一緒に生活するしかない。

そうすると、45分と50分の授業はどうやってやるか。チャイムは鳴らさないようにしよう。運動会で同じ校庭、同時に使いたいけれどどうするのか。プールの深さは、小学校は90cmだけど、中学校は110cmだから、手がプールの底をすってすりむけてしまうだろう。どうやって使うのか。それらの問題に対して、いろいろ知恵を絞ってそれらを解決していきました。その解決した方法は一つ一つ、アーカイブして括ってあります。それを使っていただくことはもちろん可能です。

もう一つは、いわゆる未来を築く子どもたちを育むためには一体、我々に何ができるのかという話ですけども、佐々木会長さんが、丹野学教育長さんの話を引用されて、あの当時は先生方もすごく頑張っていた。地域もそうだけど先生方も本当によくやっていたと言ってくれました。あとは、秀美先生も「疾風に勁草を知る」と言いましたけれども、みんな勁草だった。風雪に耐えて足を踏ん張って、首を押さえつけられてももう一回はい上がって歩こうとしていた。漫画でも私たちの年代の星飛雄馬とか今の子どもで言うと「ワンピース」のルフィーとかだっても負けても立ち上がっていく勁草です。つまり、そういう子どもを我々が創っていく仕組み、仕掛けを作っていくことでしょ。

アメリカの心理学者のアンジェラ・リー・ダクワースという人は、GRIT（グリット）というのが必要なのだと言いました。生きていく力というのは、アメリカではグリットと言いますが、今はアメリカの海兵隊やOECDの教育プログラムにも採用されています。グリットを頭文字を訳すとG（ガッツ）R（レジリエンス）I（イニシアチブ）T（テナシティー）、全て粘り強いという意味です。同時にグロスマインドセットという考え方をスタンフォード大学の先生が述べています。簡単に言うと、できない人間なんていない、一生懸命頑張れば誰だってできるのだという考えです。グロスマインドセットとグリットを子どもたちに培うような教育課程を我々は工夫していけばいいというのが私の感想です。

佐藤秀 水谷先生からは、心のアーカイブというものを大事にしていく必要があるのではないかと。さらに、あの困難を乗り越えてきた我々だからこそ、強い子どもたちを育てる仕掛けを今こそしっかりとやっていくべきだろうと、3.11を経験したからこそ、それができるはずだという力強い

エールをいただきました。

岩崎 双葉地区は特異な地区でして、先生方の異動サイクルが早いのです。ですからアーカイブをどう伝えていくかということが大事になってくるのです。

また、双葉郡出身の管理職が圧倒的に少ないですから、他管内の校長先生方のお力を借りて双葉郡の学校経営をしていくのですけども、やはりこの学校に勤める先生がその町のことを知らなかったら、教育はできないということだと思います。

震災を風化させないために私がずっとやってきたことは、4月の1日に、職員会議をすぐやらないで、小中の先生を全部集めて研修会を開くということです。そこで、この町は一体どういうことがあったのかということをお伝えします。職員に富岡町民は私一人しかおらず、加えて震災当時は富岡第二小学校に勤めていましたので、当時のことも分かっています。ですから次のようなことを話すのです。震災当時から何が合った町なのか、避難先でどんなことがあったか、三春で再開した学校はどんなことがあったか、地元でどういう思いで戻ってきたか、地元でこの2年間どういう学校づくりをしてきたか、それから、ここにいる子どもたちだからこそ防災、放射線教育が大事なんだということ、どんな取組をしてきたかということ、心のケアのやり方も伝えていきます。このようなことを先生方に分かってもらってから、子どもたちに向き合ってもらいたいと考えています。ですからそういう記録をたくさん残しておいて、それを歴代の校長に繋いでいって、職員会議の前に富岡町というのはこういう町だったということをお伝えしてほしいと思っています。

また、三春町にある三春校はあと2年で閉じるので、6年生の総合学習の時に私が授業に入って、「三春校はあと2年間で無くなります。」と言いました。子どもたちは驚きます。続けて「では、君たち、この総合学習で何をやる？」と問いかけると、「この三春校の歴史を残したい。」という答えが返ってきました。そこで、三春校に関わった方たちすべてにインタビューして、それを動画にとって一つのDVDに残しました。「ぼくたち私たちの三春校」です。三春校の跡地は更地となります。全部更地になって思い出が全部無くなるから、その前に記録を取っておこうということです。

さらに、三春校の時もそうでしたけど、富岡校

の時にも、物が無いので、私は先生方に、「校長先生、〇〇がないからできません。」という考えではなくて、「どうやったらできるかって考えましょう。」と言ってきました。最近は何々だから…って先生方は言うんです。こうこうこうだから、その次に「だから何？その先を考えるのが我々の仕事でしょう。」ということをお話します。意識改革というようなことをやっていく必要があると思います、今進めているところです。

佐藤秀 岩崎先生ならではの取組ですね。どういう町、どういう経緯で今あるのかということをおちゃんと残す、伝えるということ、それから子どもたちにも風化をさせないための仕掛けですとか、先生方をポジティブな思考に変えていくような働きかけが伝わって参りました。

では、続いて加藤先生、お願いします。

加藤 子どもたちの未来を切り拓くということで、相馬市と本校の取組を紹介したいと思います。

未来を切り拓くためには、まず命を落とさないことが第一条件です。今回台風、そして大雨がありましたが、来年度以降もこうした気圧配置というのは、起こってもおかしくないような気象条件になってきています。ですから防災教育、特に風水害では、震災の経験と今回の経験を生かしていかなければならないと思います。

また、相馬市では避難訓練の時には市の指導主事が、実際に訓練を行っている所に出向いて、客観的に見て指導していただきます。

それから、今年の夏初めて「子ども科学フェスティバル」を開催しました。科学実験や防災、福島イノベーション・コースト構想など、行政、各企業、NPO団体、みんなで力を合わせて子どもたちのために行いました。みんなで力を合わせると低予算でも大好評でした。来年度も行うということで、学校、地域、保護者、そして官民一体となってそうしたものを創出していくことは、まさに復興の起点になるのではないかなと考えています。

最後に日立木小学校の取組ですけれども、今、校舎の長寿命化改修工事を行っております。それほど児童数が多くない学校なので、引っ越しをして空いたところから工事をしていき、4割くらいは使えるようになったのですが、大きな工事の音の中でも子どもたちは非常に落ち着いています。私は日頃からピンチをチャンスに変えるということで、そういった時だからこそみんなで「気付き

考え 行動する」というスタンスで行こうと子どもたちにも全校朝会で話しています。

教職員ですが、日立木小は生活・総合の研究校ということで研究を進めています。震災で経験した逆境には負けないんだという気持ちで、みんなで工夫して地道にやっていくという姿勢で取り組んでいます。

佐藤秀 加藤先生からは台風との関連も踏まえられながら、命を大切に作る防災教育のお話とともに、魅力ある教育を続けていく上で、予算獲得のための働きかけも大切なのだなと考えさせられました。

また、イノベーション・コースト構想に向けて子どもたちの夢を膨らませることも我々の大きな役割なのではないかと思います。

先ほど岩崎先生から放射線教育のお話がありました。放射線教育で私が危惧をしていますのは、福島原発ですから子どもたちは「フクシマ」というものをずっと背負って生きていかなければならないということです。

震災後、福島市の中学生と水俣市の中学生が1年交替で交流するという活動を行っていました。水俣も「水俣病」というだけで非常に悪いイメージをもたれてしまったのと同様、将来福島の子どもたちがいわれ無き偏見や差別を受けるとすることも考えられると思います。

岩崎先生、富岡の学校では放射線教育をどのようなねらいで、どのように行っているのですか。

岩崎 福島県以外の人たちは福島のことを知らないです。福島で原発事故が起こった。だから福島は今大変な状況になっていると考えています。会津も中通りも浜通りも関係ないです。全部ひっくるめて福島なのです。

今ここにいる子どもたちは将来ずっと富岡にいるわけではありません。将来、高校、大学、社会人になった時に県外に出ているかもしれません。県外で新しい会社に入りました。新入社員の歓迎会です。お酒が入りました。必ず出てくる話に「どこ出身。」と言われた時に「うん、福島だよ。」と言ったとして、「大変だったね。」と言う人もいれば「えっ 福島。」と言う人もいます。そしてなかつ「福島って放射線汚染地域でしょ。」とか「福島の食材って食えるの。」とか、中には「福島の食材は私は食べません。」と言う人もいます。その時に黙ってしまうような人間をつくってはいけないということなので

す。

特に富岡は。「福島はどこ。」「富岡、えっ、原発の近くですよ。」と必ず言われるわけです。その時にいろいろ質問された時に黙るような子どもに育ててはいけないというのが放射線学習のスタートでした。

ですから第1・第2ステージと考えていて、第1ステージでは放射線の基礎情報を学びます。第2ステージは「福島って大丈夫なの。」と聞かれたことに対して答えることのできるような学習をしなくてはならない。即ち風評被害、風評差別に対抗するだけの知識をもたせなくてはならない。小中までにそうした知識を身に付けさせましょうということで今は第2ステージ、人権教育とか道徳教育とかにつながるような放射線学習を進めているところです。

吉川 郡山の場合で申し上げますと、放射線教育は教育課程に位置付けられることが明記されておりまして、全学年、総合であったり理科であったりしますけれども必ず取り入れることとなっています。前段に特化して放射線教育だけ取り出して、どういう風に各学校で取り組むのかということについては全ての学校でそれぞれに生かされています。中身はというと、先ほど岩崎先生がおっしゃったように「正しい知識をもちましょう。福島県民だからこそ正しい理解をしましょう。知識を得ましょう。」ということが大きな目的です。

少し話がそれるかもしれませんが、震災直後に埼玉県に郡山から避難した方のお話を聞いたことがありました。埼玉県のスーパーに入ったら、〇〇産いくらというお米の札があり、それだけ見れば秋田県産なのだなとか他県産という風に思ったらしいのですが、福島県産の米は撤去されたということを知った時に、とっても悲しい思いがして、福島県は差別されているんだと思ったということでした。正しい理解をしていけば福島県産の米は実は一番安全だということが分かるのですが、先ほど岩崎先生がおっしゃったように福島は危ないとなったら全てが危ないのです。それを埼玉に避難された方が悔しさをにじませておっしゃっていたのを思い出しました。

佐藤秀 会津の方ではいかがですか。

佐藤裕 会津でもやはり「正しく恐れる」ということで、各学年指導の時数を2時間は確保しています。土壌の線量がそれほど高くなかったため、教員の危機感が少し低い所があるので、放射線教

育の重要性を言い続けていくことが必要であると考えています。

佐藤秀 未来を築く子どもたちを育てる今後の教育の在り方ということで、だんだん終わりの方に入っていきたいと思いますが、皆さんから東日本大震災と原発事故を経験した福島だからこそ未来を育てる子どもたちにこれだけは身に付けさせたいということを、お一方ずつ話していただきたいと思います。

水谷 私は、除染マニュアルが国からおりてきた時に、見てびっくりしました。

大変重みのあるマニュアルでしたが、明日にでもプール開きを行いたいけれども、読み込むまでに1週間も10日もかかるマニュアルでした。でも頑張って読みました。そして高圧洗浄機でプールサイドを洗いました。金網も洗いました。しかし線量は全然落ちませんでした。コンクリートは多孔質ですから穴の中に一粒でも放射性物質が入っていれば、20年30年と放射線を出すわけです。ディスクグラインダーを買ってきて、教頭と二人でお月様が出るまで1週間プールサイドを削りましたが、それでも線量は下がりませんでした。最後は鉄板を敷いて、封じ込めました。

こんなに厚い除染マニュアルには書いてありませんでした。自分で考えました。ですから私たちが残していけるのは、その9年間で学んだ子どもたちを守るための最新の知識を、アナログでも電子でも、できるだけ簡潔に使える物として残していくことが必要なのではないかと思います。

あともう一つ。先ほど岩崎先生がおっしゃったように、陽転発想で、苦しんだ人こそ、工夫すればできるという発想ができるのです。新学習指導要領でも、「やり抜く力」として使っているではないですか。これからの教育課程の中で我々は「やり抜く力」をどうやって身に付けさせていくかということで、具体的なプランづくりに入っていけばいいのではないかなと思います。

佐藤秀 自分で考えていく。まさに今求められている力ですね。そしてそれを「やり抜く力」と、この二つが子どもたちにとって大切なのではないかというお話でした。

続いて加藤先生いかがでしょうか。

加藤 「気付き 考え 行動する」という考えは重要だと思います。困難は本当に大変だと思うのですが、この10年福島県民はこれでもかこれでもかというふうにいるんなことに対応しながら、

くじけずに取り組んできて、積み重ねてきました。ですからこの取り組んだことを子どもたちにきちんと、風化させないように知らせるといことがとても大事であると思います。

佐藤秀 加藤先生からJRCの態度目標とも重なる「気付き 考え 行動する」ということであつたり、子どもたちに伝えていくことの必要性であつたり、本質を見抜く目を育てたいというお話を伺いましたが、そのためにはまず教職員の意識を変える必要があるかと思うのですが、加藤先生だったらどのように教職員に働きかけていけますか。

加藤 私は、先生方の自主性というのを大事にしてきました。日立木小学校の職員はしっかり判断して行動しているので、自信につながるのです。やりたいことを思い切ってやれるようなそんな学校づくりを、責任は自分がとるからという安心感を持たせながら取り組むことだと思います。

佐藤秀 続いて佐藤先生お願いします。

佐藤裕 第I部の方で会長さんから地域との関係性とか、地域との関わりが大事であるというお話がありましたが、私もとても大事だと思います。

また、熊町小学校の校長先生がすごく感謝していたのはその関わり方の部分でありがたいと、我我会津の者が関わった部分に対してなのかと思うのですけれど、子どもたちもそんな時どういう風に他者と関わるかということは、やはり学校の中だけでは難しい部分があつて、地域の中で学ぶということが大事だと思います。

それで、今小学校でもコミュニティ・スクールが始まったのですが、地域を巻き込んで学校の中で育てていくというお話を聞いていて大事な視点だと思いました。

佐藤秀 今、会津ではコミュニティ・スクールに向けての取組が始まっているわけですね。

吉川先生いかがでしょうか。

吉川 今回のこの震災、原発事故もそうですが、子どもたちから見たら全ては大人たちが関わっていることだと思うのです。そういった意味では大人の責任として、あるいは教師として責任をもつために今やることというのは、先ほど来申し上げている安全・安心な環境を作っていく、子どもたちのために安全で安心な学びの環境を作っていくことが私たちの大切な役目であると思っています。

併せて子どもたちも、これから大震災や原発事

故から考えていってほしいと思うことは、先ほど「やり抜く力」という言葉も出ましたけれど、自分で安全・安心の環境を作っていけるような、子どもたちを育てていくことが大切だと思います。子どもたちが主体的に動くためには我々も主体的・自主的に目標に向かって動いていく姿を子どもたちにも見せたいし、大人になった時、自らそういう環境を作っていくんだというような子どもたちを育てていきたいと思っています。これは学校教育全体を通じてやっていく必要があると思っています。

岩崎 双葉郡の実態を考えますと、極少人数の弱点というのがあります。これはやはり同年代の子どもたちとの切磋琢磨ができないということ、人数が少ない故にお互いの考え方が阿吽の呼吸で分かってしまうということです。あとはいろんな意見に触れることが少ないということと、自分の意見に対して肯定する人、否定する人、自分以外の考えを發表してくれる人、そういう意見に触れることが非常に少ないということです。我々が富岡の子どもたちに育てたい力というのは、多様な考えを聞いて、まずはそれを受け入れて、自分の考えをもって、そしてそれを分かりやすい言葉で相手に伝えていくという力だと思っています。

学校内だけでは教育は完結しません。マンパワーが足りません。だったら地域の力を借りようという発想です。地域の方といっても多世代です。ですから今取り組んでいるのは多世代教育です。様々な年代、職業の方に学校に入ってもらって、いろんなことを子どもたちと一緒にしていく、または子どもたちの前で自分の思いを語っていただくとか、いろんな考え方に触れさせます。

それから、同年代が少ないからどうするとなった時に、近隣の学校に行くしかないと考えました。檜葉の学校に3・4人の子どもを連れて行き、一緒に授業を受けさせます。で、もまれてくるんです。そういう経験も絶対に必要だろうと思います。しかし何回も行うことは難しいので、次に考えたのがテレビ会議システムを使った遠隔授業です。ライブ授業と言っていますが、同年代同士で、お互いの意見交換をそのライブ授業を使って行います。最近では45分間つなぎっぱなしにはしません。自分たちの考えをもたせた後、テレビをつないで意見交流をするという遠隔授業をやっていると思います。

他に富岡でやっているのは、その道のプロを呼

ぶことです。教室を一つの作業場にします。去年大工の棟梁さんをお願いし、富岡町の松の木を使ってテーブルを2つ作ってもらいました。釘を一本も使わないテーブルです。親方が来て作業をしますが、親方は何も教えません。子どもは何やっているんだろうと見ます。興味があるから親方の手伝いを進んでやります。そのうちに親方の道具の手入れとか、後片付けまでが仕事なのだというのを親方が見せるのです。背中では教えるということです。この取組は子どもたちに大きなインパクトがあったようです。今年は油絵のプロを呼び、油絵を描いてもらおうと計画しました。子どもたちは画用紙を持ってその先生の所に行くわけです。その先生は教えてと言われれば教えます。

また、富岡の場合は県外の学校ともつながりがあります。小学校は東京都にある学校とライブでつながっています。12月に2泊3日で向こうの学校に5人の子どもたちを連れて行き、1日交流させて一緒に授業も受けさせました。そういうことをさせることによって先ほどお話しした、いろんな考えを聞いて、自分で考えて、自分の考えをもって発信することのできる力を双葉郡の子どもたちに付けさせたいと思っています。

佐藤秀 極少人数の中で、無い物ねだりをするのではなく、その強みを最大限に生かしていく。そのために、まず発想を転換していろんなことに取り組まれているという事例をご紹介いただきました。

加藤先生が以前に勤務されていた、3校が仮設校舎で学んでいた、飯樋・草野・白石小学校、私も何度か拝見させていただいたことがありますが、「立派な仮設校舎ですね。」と言ったらある先生が「これが本当の校舎だと子どもたちには思ってもらってほしくないんです。」とお話しされたのが印象に残っています。でも、閉校式の時に6年生の女の子が、「6年間通った自分たちにとって、ここは『仮設』なんかじゃない。」と言ったと聞きました。子どもたちにとっては、そこで過ごした時間は決して「仮」の時間ではなく、「本物」の時間だったのです。あの中で子どもたちは確かにあの時一生懸命だった先生方と一緒に、いろんなことを経験して、たくましく育っていると思うのです。そこから私たちも学ばなければならないんだということを、先生方のお話を伺いながら、私自身改めて実感させられました。

佐々木 はじめに、二本松市の丹野学教育長さん

に、「最後我々に向けて何かお話してください」とお願いしたところ、二つお話しいただきました。

一つ目は、校長は、地震があった時いつ避難するのか、ということを問われました。その覚悟を今の校長先生方はもっているのでしょうか。働き方改革の名の下に、逃げていないでしょうか。そういう学校経営のスキルを学ぶところが校長会だというお話でした。

二つ目の、今後の学校ではということでは、リスクマネジメントとクライシスマネジメント、日本語に直すと危機回避能力と危機管理能力と言いますが、危機回避能力も大切ですが危機管理能力が今問われているのではないかとということです。これは校長もそうですが、子どもたちに育てていく必要があるのではないかとということでした。自分はその当時多くの方々を学校に受け入れ、様々な要望も伺ってきました。その時にそうした要望・苦情に目を向けてやるのが校長の一番のことかと思ったのですが、まず子どもたち一人一人に目を向けることが校長ではなかったのかと私は思うということでした。そして、皆さんからお話があったように、前向きに生きる子どもたちを育てることが校長の仕事だろうとお話してくださいました。

私から、最後にキーワードとして8点のことをお話しし、まとめとします。

1点目は「風化」です。風化させないための取組として、郡山の方では本を作ったり児童の作文を載せた記録集を作ったりしていることを伺いました。アーカイブの話もありました。会津では学ぶ機会を設けている、双葉ではふるさとを子どもの心に残しているということでした。そのような取組によって、教員の心にも子どもの心にも残さなくてはいけないと思います。福島だからこそ風化をさせないようにしていかなければならないということです。

2点目は「子ども像」です。先ほども出てきましたが困難に遭っても、乗り越えられる、頑張る、粘り強くやり抜く、そういった子どもが私たちの目指す子どもなのでしょう。

3点目は「教師像」です。前向きな姿勢、頑張る姿勢、そして自主性・主体性を育まなければならない。それが校長の仕事だと考えています。そしてそうした教師の姿を子どもに見せることが大切だということです。

4点目は、「危機への対応」です。これは校長

だけでなく子どもも危機への対応ができなくてはならないということです。命を落とさない。「安全・安心」といった言葉もあったかと思います。そのために、校長としてできることがあるのではないかとということです。

5点目は、「連携」です。市町村との連携、保護者との連携、教員同士、校長との連携、多世代にわたっての連携など、そうした連携をしっかりとしていかなければならないということです。

6点目は、「風評」です。放射線教育の話もありました。風評に負けない子どもに育てるために、しっかり知識として子どもたちに教えてあげないと福島の子もたちはかわいそうだということです。

7点目は、「双葉から学ぶ」です。今、極少数、それから「ふるさと創造学」など、様々なことを教えていただきました。そして、こういったことをやはり双葉だけで留めておかず、県全体、全国へ配信することも、今の我々の責務というか責任なのではないかなと感じています。そしてそれを学校経営に生かすことだと思います。

最後は「覚悟」です。これについては、説明は我不想と思います。

佐藤秀 皆さん、本日は貴重なお話、ありがとうございました。

